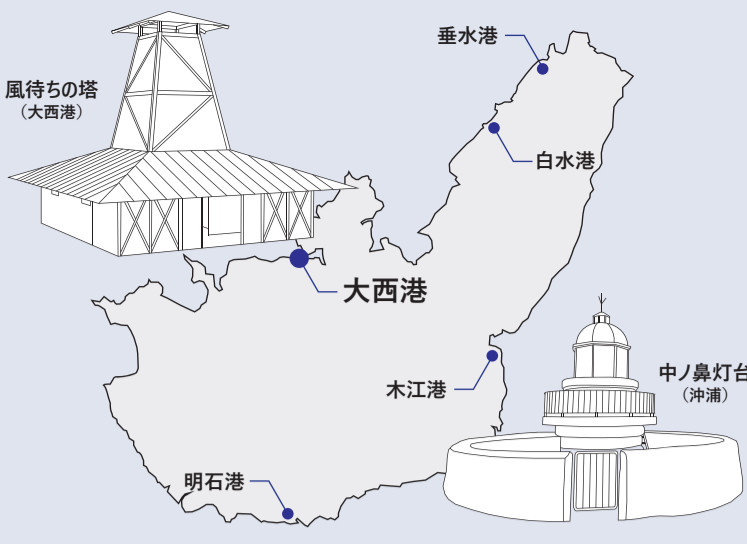


風待ちの塔

大崎上島の玄関口として、潮風と人々を迎え入れ、送り出す。昼間は島民も旅人も集まって賑わい、夜は静かに海と街を照らす。中ノ鼻灯台や観光案内所といった島の要素と共鳴しながら、街のシンボルとなる「風待ちの塔」としての待合所を提案します。

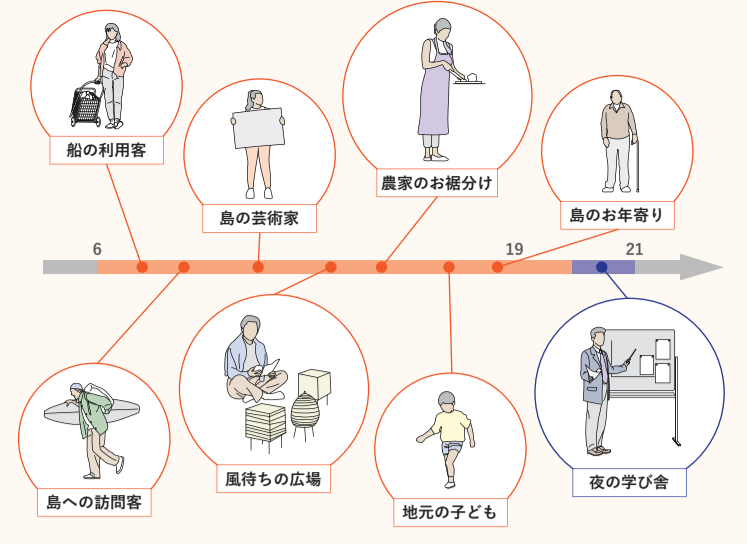
01 大崎上島のシンボルとして

大崎上島町には5つの港があり、大西港は中でも本州から島を訪れる人々を迎え入れる玄関口となる場所です。ここに新たに建つ待合所には、利用者にとって快適で利用しやすいだけでなく、街のシンボルとしての意味合いが含まれると考えます。島の南東部、沖浦では中ノ鼻灯台が今も海と街を照らし続けています。近年、取り壊しが相次ぐ灯台ですが、「灯台マニア」と呼ばれる人もいるように、その象徴的な価値は今も確かにあると考えます。文化的、そして観光の価値を持ち、どんなときも辺りを照らしてくれる、そんな存在が大西港にも必要なのではないでしょうか。そこで、沖浦の反対側に位置する大西港に、従来の土木構築物としての灯台ではなく、訪れる人々を迎え入れ、街に光を灯し続けるような「風待ちの塔」を計画します。



02 もう一つの「風待ちの広場」へ

新たに建つ待合所は、白水港の観光案内所と連携しながら、もう一つの「風待ちの広場」となるようにデザインしました。旅人と利用者の住民が変わるだけでなく、農家の人がお裾分けに来たり、話し相手を探しにお寄りの方が訪れたり、誰もが気軽に来れるような待合所を考えました。そこに行けば誰かになれる、暮らしの中心であり、旅の中心である、そんな場所になることを目指します。また、この待合所は島内の3つの高校の中心に位置しています。フェリーの最終便が港を発つ19時半ごろから、待合所は「夜の学び舎」として高校生と島の人たちが相互に学ぶ場所になります。大崎上島学、国際的な教育、海洋工学などの専門教育を行う特色ある3つの高校と連携しながら、「教育の島」づくりに貢献します。

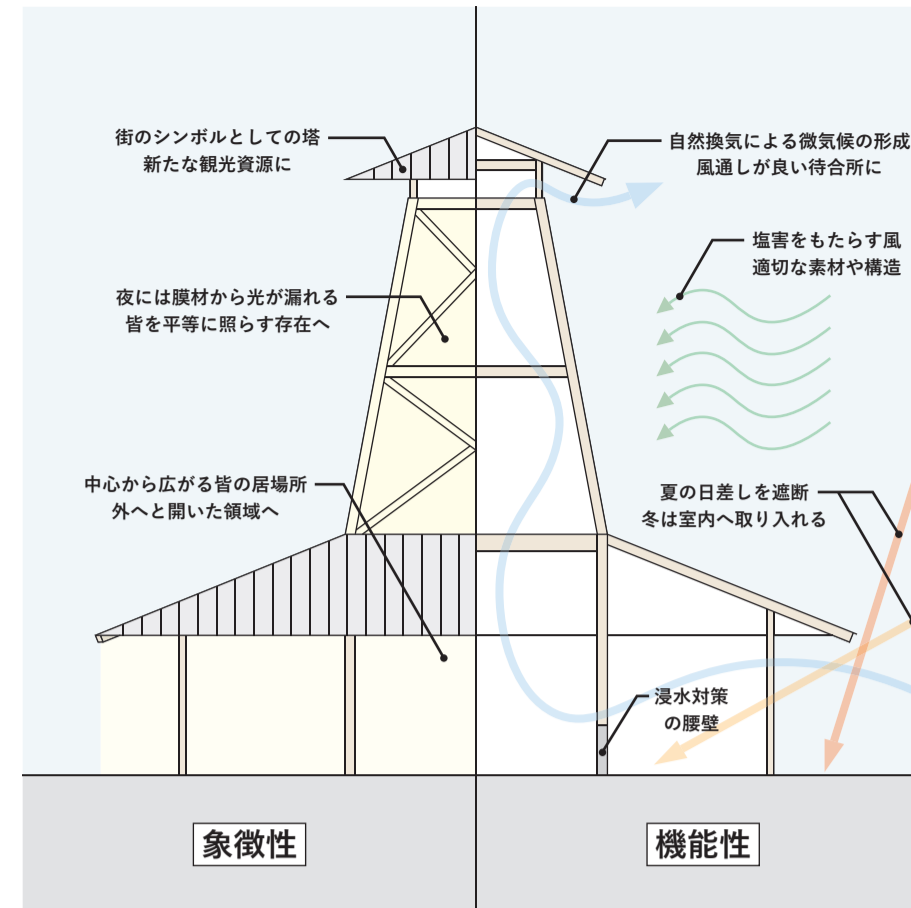


03 象徴性と機能性の両面を備えた「塔」

街のシンボルとなる「風待ちの塔」ですが、この塔は象徴的な価値だけでなく海沿いの過酷な環境を耐え抜く機能的な特性も兼ね備えています。環境やコストの削減に貢献しながら、人々にとって居心地の良い待合所が実現します。

■ 街のシンボルとして (象徴性)

- 海からも街からも視認しやすい「風待ちの塔」は、構造体の外皮に廉材を用いることで夜間は柔らかな光が漏れ、辺りを照らします。港周辺の安全性も高めることが期待されます。
- 待合所は外部に開放することができ、領域を広げた広場空間が形成されます。この待合所の設えが開かれた皆の居場所を体現します。



■ 海沿いの環境に対する設計 (機能性)

- 塔状の建築は自然換気を促し、風通しの良い空間が生まれます。夏は暖かい空気が上部から逃げ、快適な環境を作ります。
- 軒の出が深い庇により、夏は直射日光を遮断し、冬は暖かい自然光を室内へ取り入れます。
- 海からの潮風による塩害を防ぐために、構造は塩害に強い木造とし、壁体、膜材、床についても塩害に強く、清掃が容易な素材を選択します。
- 浸水対策として、高さ1050mmの腰壁を設置します。

04 柔軟に領域が広がっていく、海と街に開いた待合所

フェリーの到着前に多くの利用客が集まったり、月2回の「風待ちの広場」のイベントで賑わったり、はたまた夜が明けて皆が家に帰ったりと、様々な場面が考えられる待合所であるからこそ、扉の開け閉めによって柔軟に領域を作るプランとしました。

■ 通常時 (フェリー待ち)

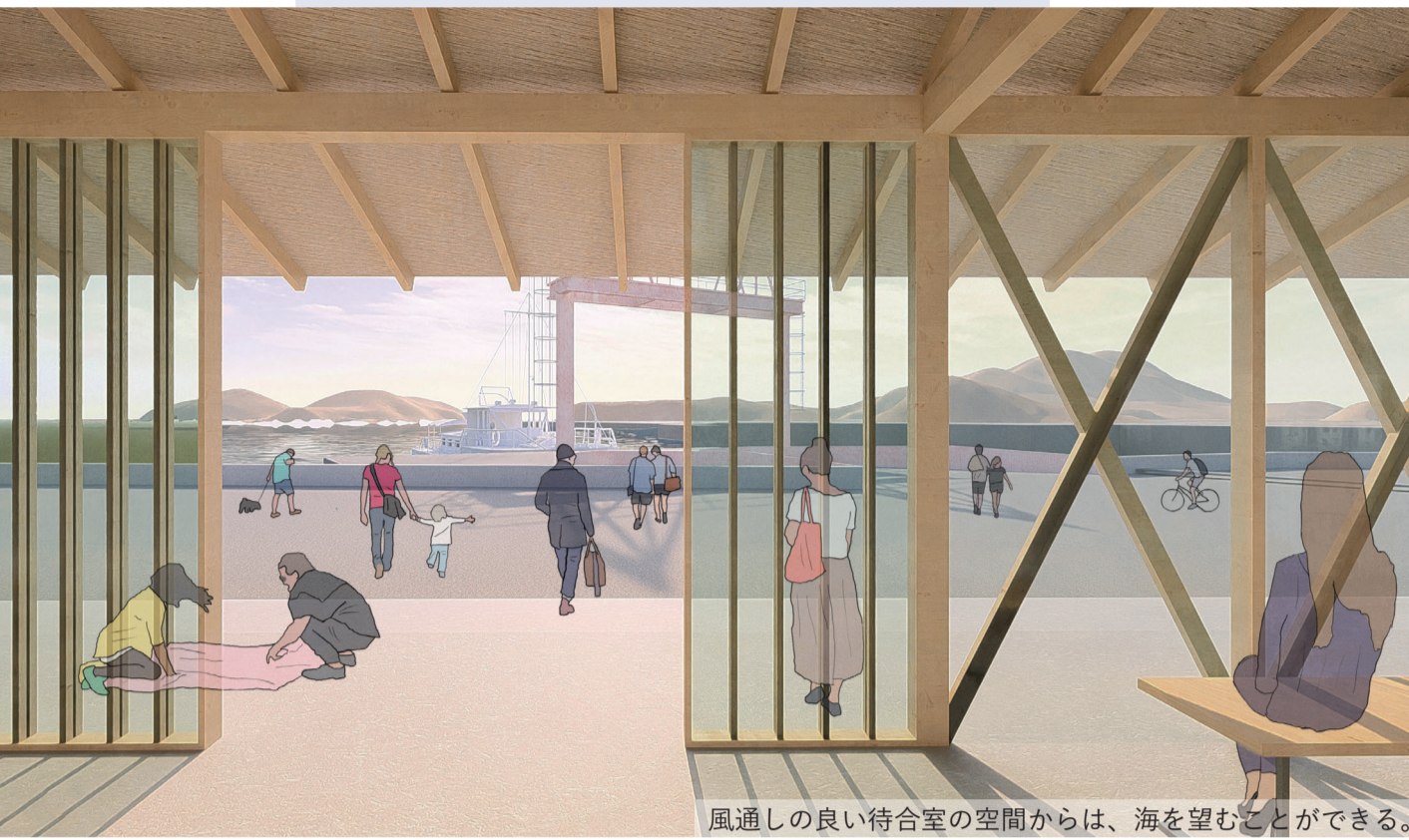
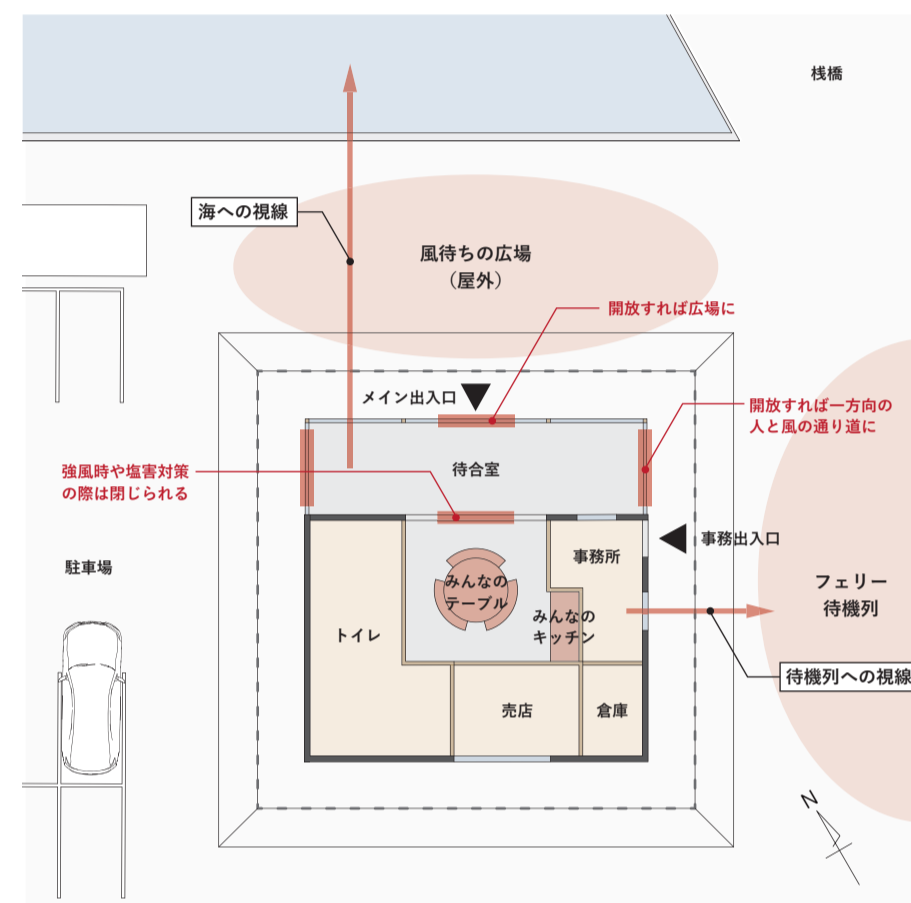
その日の天候や風向きによって、自由に開口を開けられます。風が欲しくなったら北側の扉を開ければ外から吹く風が塔の上部へと抜けていきます。北側はガラス戸なので、扉を開けても事務室から待機列や桟橋へと視線が通ります。

■ イベント時 (風待ちの広場)

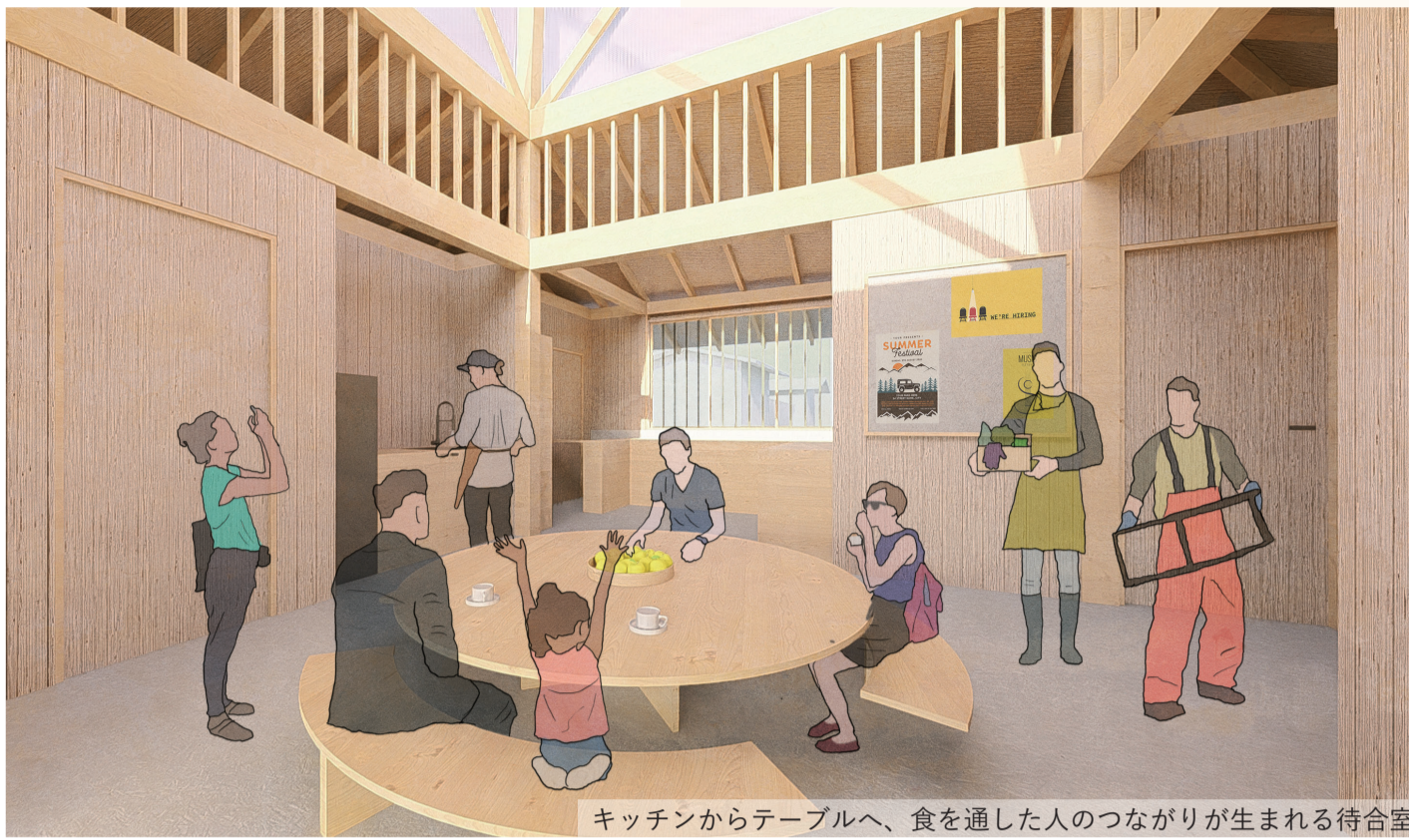
全ての扉を開放することで、外と一体となった広場空間が生まれます。お店を出したり、弾き語りが始まったり、そんな空間が広がります。売店の窓を開ければ、建物全体を風が通り抜けていきます。

■ 閉鎖時 (夜間、強風時)

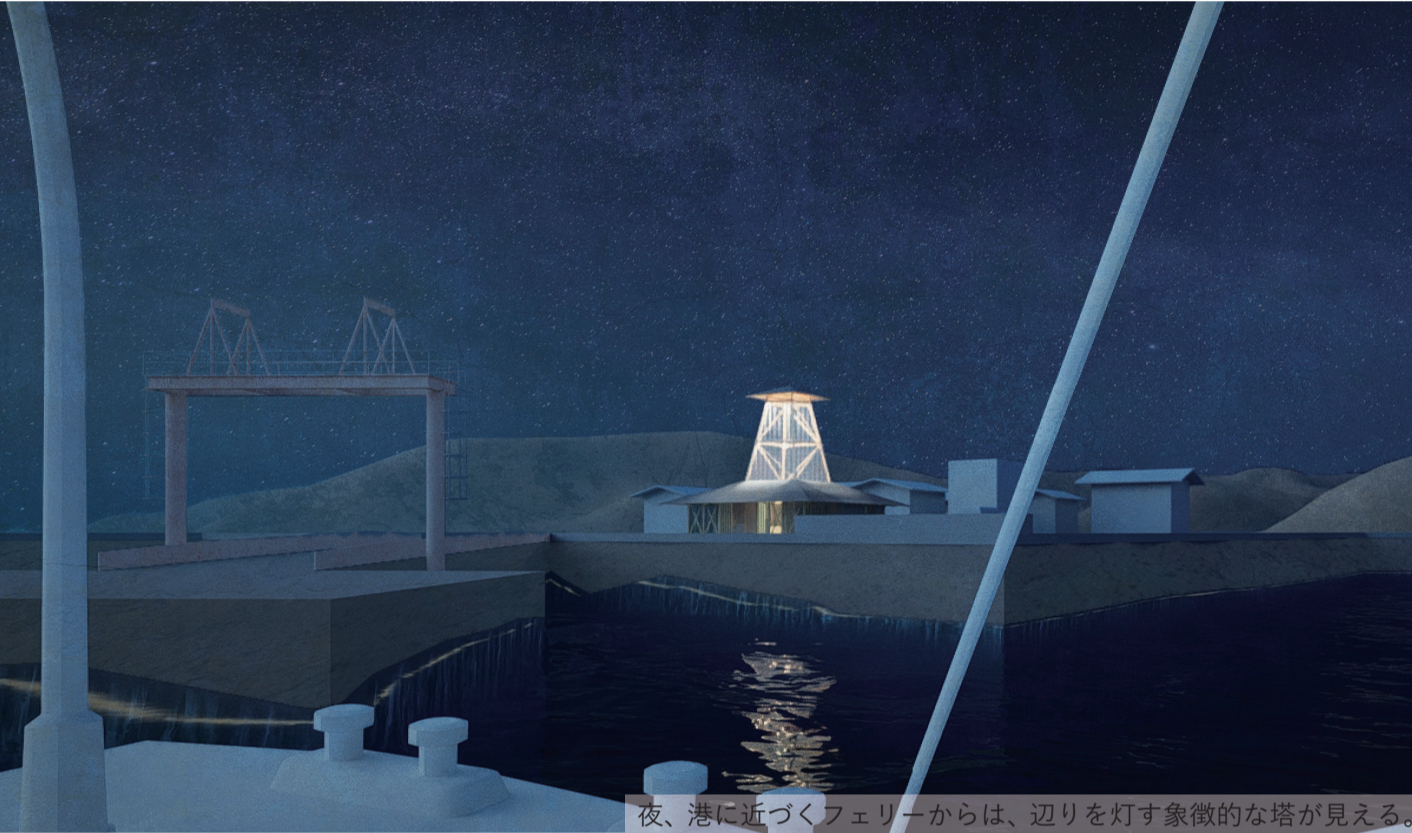
全ての扉を閉鎖すると、南側は閉じた壁に囲まれた一室空間となります。強風時にも潮風が内部に入ることを防ぐことができます。夜間には、静かな空間でテーブルを囲んで話をすることもできます。



風通しの良い待合室の空間からは、海を望むことができる。



キッチンからテーブルへ、食を通した人のつながりが生まれる待合室。



夜、港に近づくフェリーからは、辺りを灯す象徴的な塔が見える。



待合所と海に挟まれた広場空間は、イベントをはじめ様々な活動の場となる。

■ 自然エネルギーの活用

塔状の構造体は自然換気を促し、塔の下の1300mmの隙間から各部屋からの空気が上へと送られます。庇の角度と長さは夏の直射日光を遮断し、冬は最大取り入れるよう決定しました。壁体には断熱材を入れ、快適な温熱環境を作ります。

■ 塩害への対策

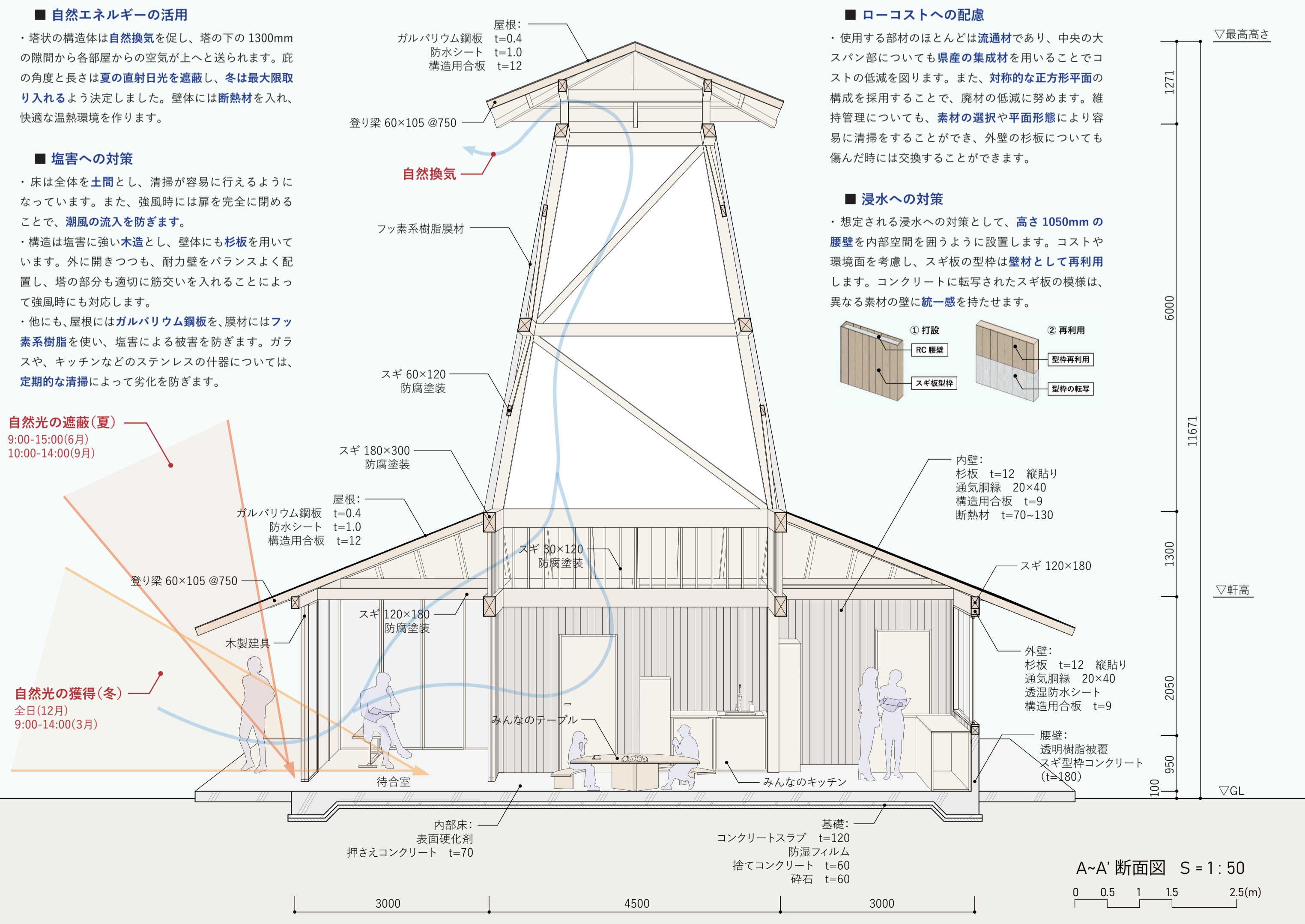
床は全体を土間とし、清掃が容易に行えるようになっています。また、強風時には扉を完全に閉めることで、潮風の流入を防ぎます。構造は塩害に強い木造とし、壁体にも杉板を用いています。外に開きつつも、耐力壁をバランスよく配置し、塔の部分も適切に筋交いを入れることによって強風時にも対応します。他にも、屋根にはガルバリウム鋼板を、膜材にはフッ素系樹脂を使い、塩害による被害を防ぎます。ガラスや、キッチンなどのステンレスの什器については、定期的な清掃によって劣化を防ぎます。

■ 自然光の遮蔽 (夏)

9:00-15:00(6月)
10:00-14:00(9月)

■ 自然光の獲得 (冬)

全日(12月)
9:00-14:00(3月)

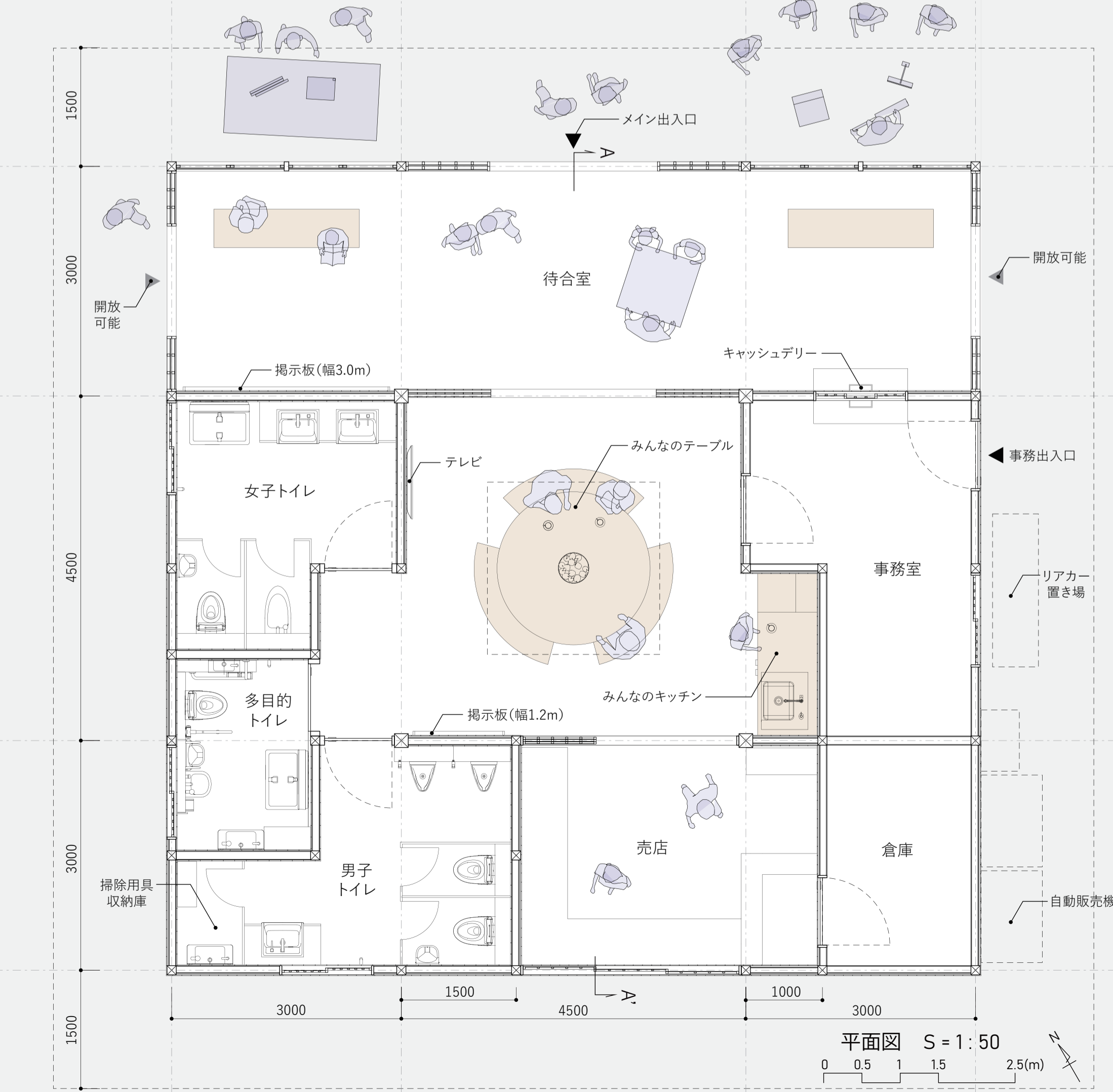
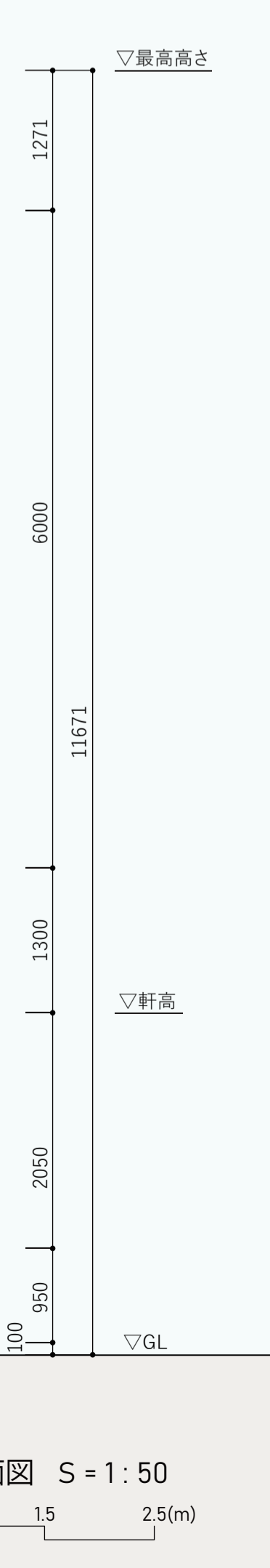
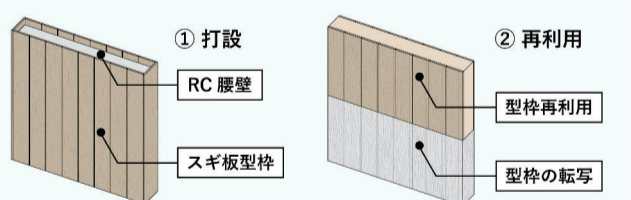


■ ローコストへの配慮

使用する部材のほとんどは流通材であり、中央の大スパン部についても県産の集成材を用いることでコストの低減を図ります。また、対称的な正方形平面の構成を採用することで、廃材の低減に努めます。維持管理についても、素材の選択や平面形態により容易に清掃をすることができ、外壁の杉板についても傷んだ時には交換することができます。

■ 浸水への対策

想定される浸水への対策として、高さ1050mmの腰壁を内部空間を囲うように設置します。コストや環境面を考慮し、スギ板の型枠は壁材として再利用します。コンクリートに転写されたスギ板の模様は、異なる素材の壁に統一感を持たせます。

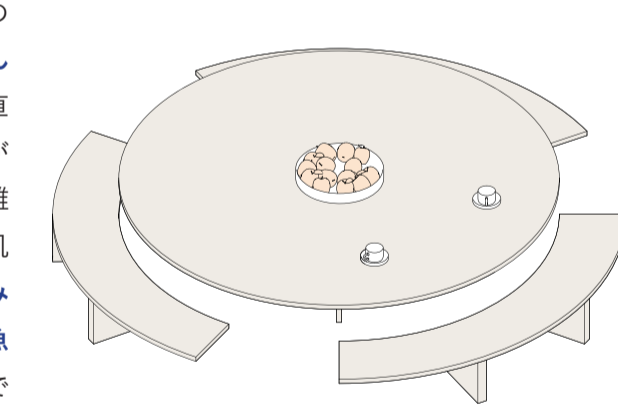


05 人の繋がりを作る、色々な仕掛け

地元住民と旅人の両方が集い、交流が生まれるような待合所にするために、仕掛けとして、3つの仕掛けと仕組みをデザインします。

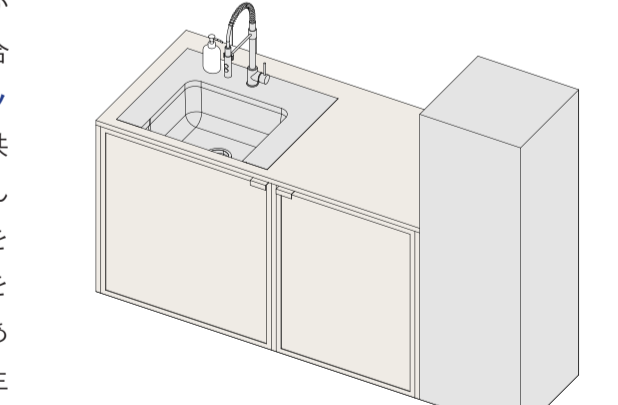
1. 待合所の中心となる、みんなのテーブル

待合所の中心、塔の下に置かれるのはみんなのテーブルです。直径2mの円卓は、皆が囲いながら程よい距離感を生み出します。机には、取れたのみかんや住民の捌いた魚料理などが並び、皆で食事を楽しめます。



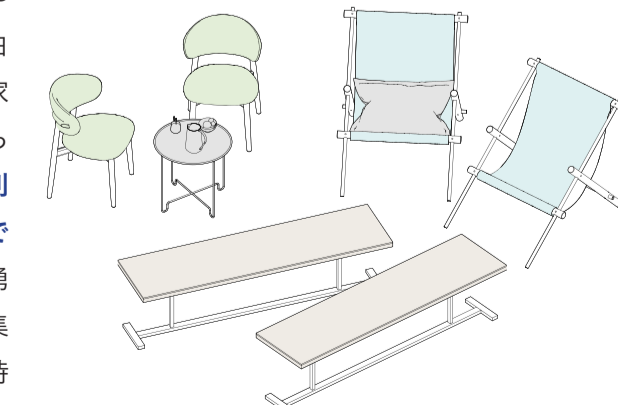
2. 食を通した関わりを作る、みんなのキッチン

現状、事務室に置かれたキッチンは、待合室に出し、みんなのキッチンとします。皆で共有することで、みかんを切ったり、洗いをしたり、簡単な料理をしたりと島の文化である食を通した交流が生まれます。



3. 思い出のつながりを作る、家具のリユース

待合室に置く椅子や机のような家具は、白水港の観光案内所の家具のように住人のいらなくなったものを再利用したり、住民自らで制作します。愛着の湧く個性豊かな家具が集まり、いつもの待ち時間を彩ります。



06 面積表

待合室	54.0 m ²	多目的トイレ	5.8 m ²
事務室	11.2 m ²	男子トイレ	11.5 m ²
売店	12.0 m ²	女子トイレ	9.7 m ²
倉庫	6.0 m ²	合計	110.3 m ²